

## 食中毒における病因物質の概要 (2011 年度)

石原 雅行、平野 学、北川 由美香、山口 顕徳、右田 雄二、吾郷 昌信

### Summary of Epidemiology of Food Poisoning in Nagasaki Prefecture in the year 2011

Masayuki ISHIHARA, Manabu HIRANO, Yumika KITAGAWA, Akinori YAMAGUCHI,  
Yuji MIGITA and Masanobu AGOH

key words: Food poisoning, *Norovirus*, *Staphylococcus aureus*

キーワード: 食中毒、ノロウイルス、黄色ブドウ球菌

#### はじめに

1997年5月30日の食品衛生法施行規則の改正でノロウイルス(2003年8月29日同規則改正で小型球形ウイルスから名称変更)およびその他のウイルスと腸管出血性大腸菌が、1999年12月28日同規則改正によりコレラ菌、赤痢菌、チフス菌、パラチフスA菌が食中毒事件票に病因物質として追加された。これらの施行規則の改正により、ウイルス性食中毒が位置づけられるとともに、コレラ菌等の4菌種についても飲食に起因する健康被害発生時は、他の食中毒病因物質と同じ措置がとられるようになった。

本報告では、1998年以降に長崎県下で発生した食中毒の主要病因物質の経年推移と2011年度に発生した本県食中毒事例で検出された病因物質を示した。

#### 調査方法

##### 主要病因物質の経年推移

長崎県生活衛生課が取りまとめた2000年～2011年の食中毒発生状況一覧表(長崎市及び佐世保市の発生届出分含む)をもとに、主要病因物質(細菌、ウイルス、自然毒及び化学物質等)ごとに事件数および患者数を集計した。

##### 2011年度病因物質の概要

各々の食中毒事例について、発生状況および病因物質の詳細な調査情報を県内の所轄保健所から収集した。

#### 結果及び考察

##### 主要病因物質の経年推移

2000年以降2011年までの本県において発生した食中

毒の病因物質ごとの事例数及び患者数の推移を図1及び図2に示す。

2004年までは、細菌性食中毒の中で *Salmonella enterica* subsp. *enterica* (サルモネラ属菌) と *Vibrio parahaemolyticus* (腸炎ビブリオ) は常に主要な病因物質であった。ところが、2005年以降、サルモネラ属菌による食中毒は頻出血清型であった *Enteritidis* の検出頻度の減少に伴い、事例数及び患者数に減少傾向がみられた。腸炎ビブリオは、2005年頃から事例数が減少し、2007年度以降は発生がみられなかった。

しかしながら、*Campylobacter* spp. (カンピロバクター属) による食中毒は、2006年をのぞいて継続して発生している。

ノロウイルスによる食中毒事例は2000年以降、毎年発生し、2003年および2007年はそれぞれ790人、379人にのぼる大規模発生により患者数が突出したものの、2007年以降、患者数は20～111名で横這い傾向を示している。

自然毒食中毒の大部分はフグの喫食によるテトロドトキシン中毒で、死者が発生する年もみられる。本県では自家調理による発生事例が大半を占め、2005年にはフグ毒による7例全てがこれに該当した。2009年および2010年には自然毒による食中毒の発生はみられなかったが、2011年には3例の発生があった。

全国の食中毒の事件数および患者数は<sup>1)</sup>、サルモネラ属菌によるものは、2000年の518件、6,940人から2011年には67件、3,068人に、腸炎ビブリオによるものは、2000年の422件、3,620人から2011年には9件、87人

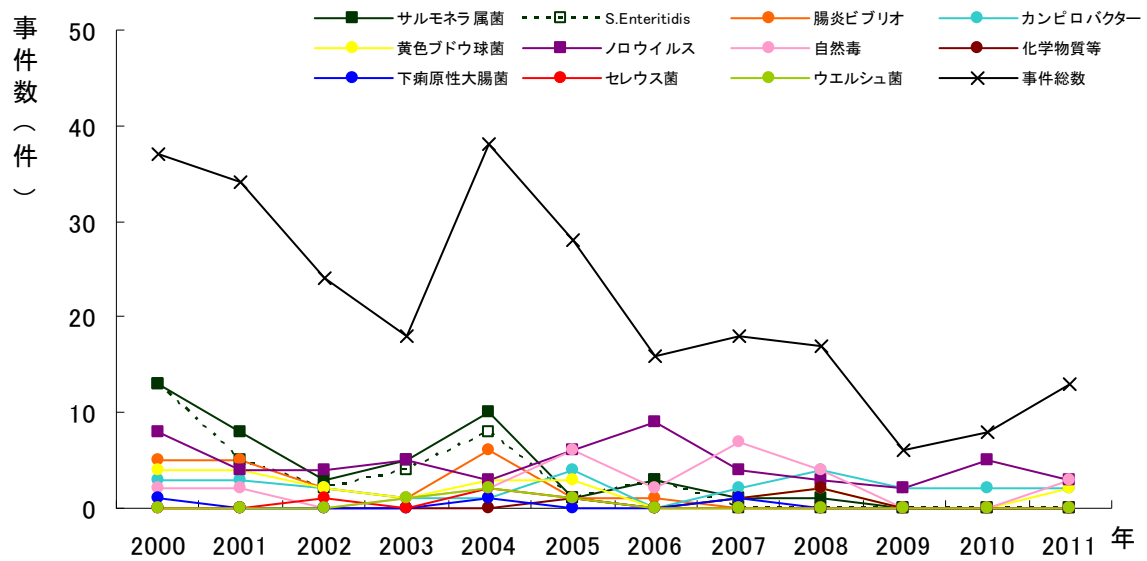


図1 病因物質ごとの食中毒事件数の推移(長崎県)

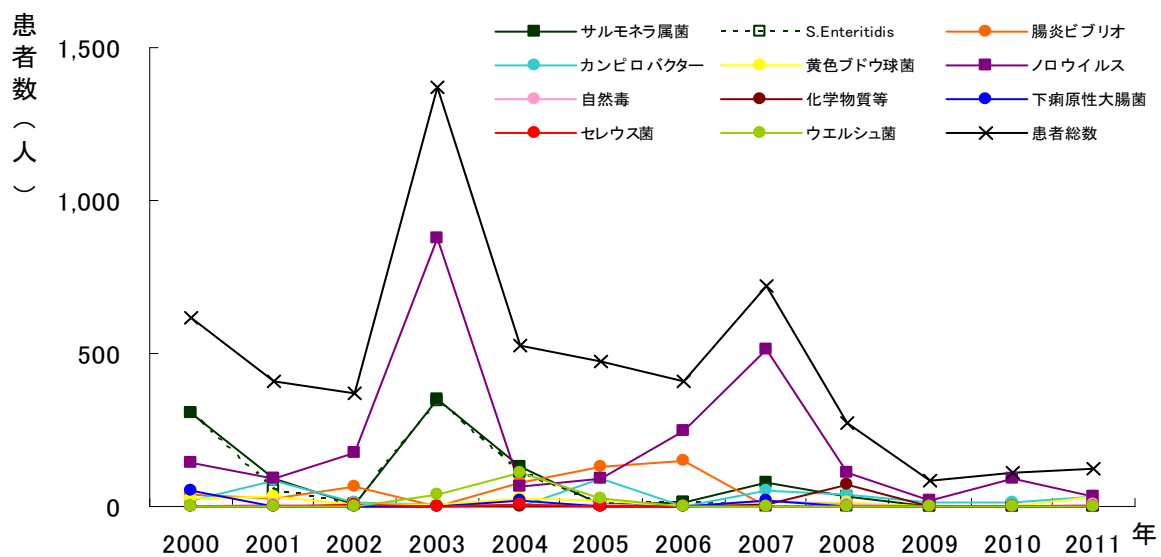


図2 病因物質ごとの食中毒患者数の推移(長崎県)

と減少している。一方、カンピロバクター属による食中毒は、2000年以降、事例数は336~645件、患者数は1,784~3,439人の発生が見られるものの、2009年以降は2,000人程度で推移している。ノロウイルスは、1997年5月に病因物質に追加されて以来、事例数及び患者数は増加傾向を示し、2006年以降ノロウイルスの患者

数は細菌性食中毒の患者総数を上回った。2011年は細菌性食中毒の患者総数10,948人に対しノロウイルスの患者数が8,619人と下回ったものの、依然として最も主要な病因物質となっている。本県の病因物質の経年推移も全国の発生傾向とほぼ同様の傾向を示した。

事例 No.	発生年月日	発生場所	取扱保健所	摂食者数	患者数	死者数	原因施設	摂食場所	原因食品	検出病因物質	検出数 / 検体数	検体(由来)	備考
1	H23.5.4	長崎市	長崎市	40	23	0	飲食店(ホテル)	飲食店(ホテル)	不明	カンピロバクター			
2	H23.5.13	長崎市	長崎市	26	11	0	飲食店	飲食店	不明	カンピロバクター			
3	H23.7.12	雲仙市	県南	7	5	0	飲食店(旅館)	飲食店(旅館)	不明	不明	0/1	(従事者糞便)	
4	H23.8.13	平戸市	県北	122	24	0	飲食店(弁当・そうざい)	家庭(平戸市内)	不明	黄色ブドウ球菌	6/6 3/3 3/3 8/8	(有症者糞便) (従事者糞便) (従事者手指) (食品)	
5	H23.9.9	諫早市	県央	2	2	0	家庭	家庭	コモンフグ	テロドトキシン			
6	H23.9.10	平戸市	県北	10	7	0	飲食店(すし屋)	飲食店(すし屋)	不明	不明	0/5	(従事者糞便)	
7	H23.9.25	川棚町	県央	55	8	0	飲食店(一般食堂)	飲食店(一般食堂)	不明	不明	0/5	(有症者糞便)	
8	H23.11.19	長崎市	長崎市	55	8	0	家庭	家庭	不明	黄色ブドウ球菌			
9	H23.11.23	諫早市	県央	1	1	0	家庭	家庭	コモンフグ	テロドトキシン			
10	H23.11.27	諫早市	県央	22	15	0	飲食店(すし屋)	飲食店(すし屋)	不明	Norovirus (G II)	0/2 9/14	(従事者糞便) (有症者糞便)	
11	H24.2.25	五島市	五島	6	6	0	家庭	家庭	不明	Norovirus (G II)	6/6 0/1	(有症者糞便) (有症者吐物)	
12	H24.3.20	新上五島町	上五島	6	3	1	家庭	家庭	アオブダイ(推定)	バリトキシン(推定)			
13	H24.3.25	長崎市	長崎市	21	11	0	飲食店(旅館)	飲食店(旅館)	不明	Norovirus (G I・G II)			

※ 本表は、県民生活部生活衛生課の食中毒発生状況一覧表(長崎市、佐世保市発生分含む)から作成した。  
 ※※ 病因物質の検出数は、長崎市及び佐世保市を除いた県立保健所・環境保健研究センター対応事例のみとした。

( )内は病因物質の詳細情報  
 ・Norovirus (Genogroup)

表1 長崎県内の食中毒発生状況および病因物質

## 2011年度の病因物質の概要

長崎県内では、13事例の食中毒の発生があった。発生事例の内訳を病因物質区分ごとに示す(表1)。

### 1) 細菌性食中毒

カンピロバクター属によるものでは2事例、患者総数34人、黄色ブドウ球菌によるものでは2事例、患者総数32人の発生がみられ、原因食品は全て不明であった。

### 2) ウイルス性食中毒

ノロウイルスによる食中毒は、3事例、32人の患者が発生した。事例No.10では有症者14人中9人からGenogroup II (GII) ノロウイルス遺伝子を検出した。事例No.11では有症者6人全てからGII型の遺伝子が検出された。

### 3) 自然毒食中毒

自然毒による食中毒は3事例発生した。2事例はフグ、1事例はアオブダイと推定される魚を自家調理し、喫食したことによるものであった。原因食品がアオブダイと推定された事例はパリトキシン中毒による

ものと考えられ、1名の死者が発生した。

昨年度の食中毒件数が7事例だったのに対し、今年度は13事例とほぼ倍増したが、その原因としては昨年発生のみられなかった自然毒食中毒および7~9月における細菌性食中毒等の増加が挙げられる。フグ等の有毒魚類を自家調理しないこと、夏期における食品の温度管理に注意を払うことが特に重要と考えられる。

## 謝 辞

本稿を草するにあたり、情報を提供いただいた長崎県生活衛生課、長崎市、佐世保市および長崎県立各保健所の関係諸氏、並びに校閲いただいた長崎県生活衛生課 嘉村敏徳および吉田史朗の両氏に感謝する。

## 参 考 文 献

1) 厚生労働省医薬食品局食品安全部監視安全課：厚生労働省食中毒統計2000年-2011年(2011)